

貞丈雜記

十六下

73
6592
32



門 7 3
號 6592
卷 32

雜事之部

一 ^{キレヨク}氣色と云事旧記は何れも人の顔つきの事と氣色
をいふもの云ふか不つきの括子を何なるに氣色
を損じると云ハ腹を主と顔つきのわるくある
を云ハ氣色よきといふもの云ハ貴人を主と顔つきの
よい物の指しとせらるるに志さうひてめつもの
を云ハ目もむせを云ハかみを云ハ髪に云ハめうあつきの
あはれむらに志さうひてけいさくハ氣色よきは
之と云ハ病氣の事を氣色といふといふ云ハ別の

雜記十六

二十八

昭和十九年四月五日
藤三郎 氏
五上 席工
贈

通書大金ニ云
赤口日忌會審
證事實賣又云
主口舌喧争赤口
日安陪清明夕書
蓋篋内侍二見
夕リ赤口日ヲ又赤
舌口トモ云ナリ又
赤口トモ云

花を枝よあはて作ると下はて作るといふ代
残は遠あると云説を志す也と云

古シマクゴ赤後の出仕と云事也京教内軍年中恒例記ニ云
赤後の出仕を時を依大名以下は赤元も亦
は系也赤後の出仕は毎月は分て年中定例記ニ
云赤の次の日の出仕とて出仕あり也と云古は供
元赤ありぬ日ハ日とも出仕はひし又云赤の目を
出供元出仕も亦ひし事も據るあり云赤の日
とい赤日といふ也日の子あり赤日ハ赤日神といふ
神のつとむと云日といふ辨古を用ふふりきと云

嵯川親元が祭
日ハ記寛正六年
の記云三法西日
三方辰戌上極午
佐州子午武庫
郊酉トアリ上
極ハ東山殿の
意也佐州ハ
伊勢守才佐中
守貞彦武庫
ハ伊勢守貞親
ノ嫡子伊勢兵
庫守貞宗
○室町日記永享
七年八月廿日祭
則は徳日之故
可以廿三日命之
由は作也云

陰陽師の祝也それ出仕せずおひを謹む
法徳日トクニチといふ旧記はるり年中定例記ニ云東山殿は
法日丑未の日ハ大名國持は供元ハ餅一折は太刀金進
上とひつどの日ハ松原十帖は太刀金まつりくは法進
上と云異阿荒ある云丑の日ハ餅大折一合大豆粉
を引合は包口きよと云信濃洞道直近未日ハ出
太刀一腰金杉原十帖は目錄云云は法徳日の事
是ハ祝日ハ人の生れ性よりて祝ふべき吉日なり
陰陽師の祝也との吉日を法日といふ也
徳目と云事本名ハ衰日ハ衰日といふおとろろの日也

申入その名を忌て徳日といひくは物^{トモ}梨子^シ八^ヤと
 三^ミ又^マ收^ウれ^レが^アあり^ノの^コと^リい^ハく^ハた^ガも^ト目^メ心^{ココロ}之^ノ衰^シ日^ヒ之^ノ
 の^ノ生^ナれ^ル年^{トシ}は^シより^シと^ル徳^{トク}日^ヒ之^ノ禁^キ裏^リ将^シ軍^{クニ}家^カ陰^{イン}陽^{ヤウ}昨^{ソク}也^{ナリ}
 徳^{トク}日^ヒを^カ考^カへ^テ毎^ス年^ニ勤^{チン}文^{ブン}を^モる^{コト}
今世ハ幸徳井といハ陰陽
昨毎年ハ徳日と云テ禁裏
將軍家ハ 法^{ホウ}徳^{トク}日^ヒハ^シ上^ウより^シ何^ニ事^トも^モ作^ス付^ケれ^ズ下^カより^シ何^ニ
上^ウ由^ユ也
 事^{コト}ハ^シ上^ウより^シ去^キ日^ヒを^カ考^カへ^テ拾^{シツ}芥^カ抄^{セウ}云^フ生^ナ年^{トシ}衰^シ日^ヒ子^シ午^ウ
 生^ナ未^ミ未^ミ生^ナ子^シ午^ウ寅^{イン}申^{シン}生^ナ巳^シ亥^ヘ卯^{ボウ}酉^ウ生^ナ辰^{チン}戌^{セウ}辰^{チン}戌^{セウ}生^ナ
子^シ未^ミ未^ミ生^ナ子^シ午^ウ寅^{イン}申^{シン}生^ナ巳^シ亥^ヘ卯^{ボウ}酉^ウ生^ナ辰^{チン}戌^{セウ}辰^{チン}戌^{セウ}生^ナ
 知^チ酉^ウ巳^シ亥^ヘ生^ナ寅^{イン}申^{シン}候^{コト}令^{コト}子^シ年^{トシ}子^シ時^{トキ}誕^タ生^ナの^ノ人^{ヒト}子^シ日^ヒ時^{トキ}
 針^チ資^シ忌^ミ之^ノ可^カ推^ス知^ル又^マ和^ワ氣^キ嗣^シ成^{セイ}朝^{チウ}臣^{シン}云^フ子^シ年^{トシ}生^ナ人^{ヒト}以^テ
 未^ミ未^ミの^ノ衰^シ日^ヒ之^ノ説^{セツ}所^{ショ}用^{ヨウ}也^{ナリ}奥^ウ書^ソ説^{セツ}不^フ用^{ヨウ}也^{ナリ}
奥書ノ説ハ右ノ
子年子時誕生ト

云説ヲサシテ
云ナルヘシ

一 公^{コウ}事^ジと云ハ禁^キ裏^リ見^ミて行^ユる改^カ事^ジを云^フ武^ブ家^カ子^シも^モ改^カ
 申^マと^シ候^{コト}親^{シン}武^ブホ^ホの^ノ人^{ヒト}皆^ハ公^{コウ}事^ジ之^ノ能^ノ事^ト也^{ナリ}対^{タイ}ハ年^{ネン}滿^{マン}
 訴^ソ訟^{ソウ}を^シ公^{コウ}事^ジと^シ云^フ年^{ネン}滿^{マン}が^シを^シバ^バ左^サ右^ウを^シ公^{コウ}事^ジと^シ云^フ
 左^サ右^ウの^ノ公^{コウ}事^ジと^シ云^フぎ^ギれ^レる^{コト}有^アる^ベ也^{ナリ}
 左^サの^ノ子^シを^シ子^シ子^シとい^ハひ^ハ右^ウの^ノ子^シを^シ馬^メ子^シとい^ハふ^{コト}有^アる^ベ也^{ナリ}子^シ子^シを^シ

持^チち^チ馬^マは^シ意^イ意^イと^シ云^フ右^ウの^ノ子^シ綱^{カウ}を^シ有^アる^{コト}故^{コト}古^コの^ノ武^ブ士^シハ^シ馬^マ子^シ
 有^アる^{コト}禮^{レイ}あ^リれ^バ必^ヒ子^シを^シ持^チて^モ多^タ賀^カ豊^{ユウ}後^ゴ古^コ言^{ゴン}忠^{チュウ}也^{ナリ}
 云^フむ^ムひ^ヒの^ノ子^シも^モ右^ウの^ノ上^ウより^シ子^シを^シ有^アる^{コト}ぬ^ヌ人^{ヒト}を^シバ^バ右^ウの^ノ子^シ
 年^{ネン}は^シ子^シ子^シを^シ我^ガ子^シと^シ云^フぬ^ヌ時^{トキ}ハ^シ人^{ヒト}子^シ持^チて^モ有^アる^{コト}

中ぐけを馬の上にてさすハ何肘も手をとりて射を
 為し之をれはたは弓持取弓子といひおよそ徳を
 ありぬ言ふと云ふ子を妻子と書くあり妻
 の字用るハ熟し又雄子雌子と書くハ熟し古書
 にはあし弓子言ふと云ふ事奉じ
 一 非家ヒカと云ふ日記は何りいふはあらずともむじ事と
 一 猿樂の家はあしぎし能く猿樂を土子なり
 武家よりしぎし武藝を能くする非家
 の記非家の不まれあし云我家崇はあしぎる
 年ハぬむべしんば

一 香カウ會と云ハ人々あし集つて香をこし遊ぶ事
 あり香カウ會合ホの熟名香カウハマヤラ
 一 香カウ時と云ハ香をこする也香を三品も五品も焼カウ
 出をまするハひをかきあしあしあしあしあし
 たるハ勝カウかきあしあしあしあしあしあしあし
 香カウ源氏香字治山香小香香を外取作法
 あり香の熟名香カウハマヤラ
 一 香合と云ハ香をおくあつめをたさあり
 二つは口とて花方お方とつうして香をたさし香の
 中よりおとりを評判して勝負をおんし香合カウの

これ礼物を考へて
言ふは世の心
をくさしたる
心

に傳へるの悪くわづのそむ人々の指すもかれも
おの傳へるその事の方事の後追も抱き傳へ
やうにとひうづ

一 成敗と書てありやあるとよむ物を成敗し物をあり
やあると書る物も物をとりけりる物を成敗と云ふ
とら付の人の罪人をころまを成敗と云ふ非に罪人
をころすも罪人を取けりるあれ成敗のつあれも
罪人斗ふかきりていかにあやまりに古書よいせし
おののさ斗ひを成敗と云ふ

一 上表と云ふ役候を辞退する事
本は我がめいよりを何事
見ても云ふに付て持る

状を表と云ふ表はあつる事とよむ字を我心の事を書つる事
心の上と云ふ表へ上るは役候を去りていも何のあまよりを役候
を退きさきといふ状をあらはして云ふ上表と云ふ上表
の後候を辞退する時は斗限りたる事といふは
の世俗候を去りて上表といひあつたり
上され上る心と上表といひあつたり

一 時刻は五更と云ふ事あり一更の戌の時を甲夜と
云ふ二更の亥の時を乙夜と云ふ三更の子の時を
丙夜と云ふ四更の丑の時を丁夜と云ふ五更の寅の
時を是を戌夜と云ふ

一 時刻をいふ初は子下丑三りあり云ふ是は古禁中
に漏刻と云ふ物あり銅の壺は水を入れて壺の下は穴
ありて水の滴漏をよみ作て壺の中は箭を

職員令陰陽
寮ノ下ニ守序
鐘鼓ヲ擊ツ
見エタリ

立止し其壺を漏壺と云其水を漏れと云其箭を
漏箭と云其箭を刻めを付け壺を漏刻といふ
其刻めの數ハ四十八と云む此一時の百を四刻といふ
定めしむおこしは箭を水の中へ立置し時を漏りて
其の二子減るに隨て箭の刻め候と云えぬ此子
ノ時ハ刻め可えぬ此子の二つと云ふ二つをぬく
子の二つと云ふ中是ハ准り知るし相を漏刻を
用於收入ハ陰陽寮と云官の支配下ハ漏刻情事と
云人をも其漏刻を守り居て鐘鼓をうつし
時をうつし云は是事之右の如く古ハ一時を四刻といふ刻り

付るも今ハ晝夜を百刻と定む初一時ハ八刻迄
あくる之彼の時の鼓をオツ數鼓トハ太鼓
ユトナリ 子午の
時ハ九ツ丑末の時ハ八ツ寅申の時ハ七ツ卯酉の時ハ
六ツ辰戌の時ハ五ツ巳亥の時ハ四ツ未キヨ
延喜式の陰陽寮式ハ見えしり鐘をオ事ハ見たり
一 物忌の事神併の部ハ記ハ事ハ
一 方遠カタノクの事神併の部ハ事ハ事ハ事
一 貝カイ覆オホヒの遊オホヒ始オホヒ詳オホヒありに原平盤表記五の奏
行綱中云五月廿日西八条へ推参しと見れハ事
言の条 教も知色に集りしり就人何事やんと思つて

あるをいふ
も女をいふ
をいふといふ
あり

一 休のあしんちうん夜のまじの男よあるハ善導
大師もいふらんきし拵むらゝ廁のた板の下
箱を入置てそ箱の中へ屎をひき入るおくとをひる
りをもとこむといひ屎の事をいふといふあり
一 二と云たところなりいひいふといふことなり
三ツ四ツ持てし玉をとりてきかおま知原と云人
於才一の子鼓と一二の上のこと及びて鎌倉
頼朝の嫡子子萬殿 頼朝の
おけいなる 一二をいふせしめ
り源平盛衰記卷三十四云云期時成冥未下白の
条よええたり

一 南天 ナンテン 木名南天 燭と云 を燈に極きて光りえれば災を辨る

云又鏡の表に入或ハ軍陣の時のみあひあはる
て災をもとめり云事南天は災をもとめり
能ハるも南天といハ難精と目ト音あり和純を信
と云心して用る也災能を抄返して吉事よ出ると
云事と畢竟物のしひより出ると

一 古書ハ何事あるをいふ所延年を催せんとすハ
延年ハ欲ひ壽ありし樂に壽命を延ぶ心
一 火爐 カマド 日 ヒ 炭を置くと白炭ハ子とて重くなり
火箸を引る所ハ宗五一冊 宗一 の事云ハ

九月晦日よりあきけて三月晦日よりあきける山越下
 表面ははいつりあきける常のゆあより入はは炭を
 炭として和泉國横山と云ふ所は焼く炭として対面
 するはちうぢぢの火障をらるる中炭をさくをゆか
 書いふゆゑ動く男女曰く……子は付ぬやうにぬひめの
 どの弟妹と云む……さるは方はいまありの女房の……
 けり……けり……けり……けり……けり……けり……
 をつれゆをほむも傍に……のす……
 おもひ……おもひ……おもひ……おもひ……
 てまの……てまの……てまの……てまの……

中々この人をさあ……修明門院のは……
 々人……
 き……
 古……
 ら……
 炭……
 と……
 う……
 へ……
 お……

一 白炭シラスのあり宗五一冊と云和泉國横山と云ふ所を焼

と利徳との遠也世の鏡は名を以てす徳を以て
と云換徳も仁義の徳を以て思ふ人の名を捨
て利徳を以て思ふこと思ふ所の利徳を好む
禍の本也

一 萩の灯ハ油火本式之禁家ノハ油火を用らるゆ

灯の事をおふとあざらと云

おふとあざらといハ
大角油の略也 大角油

と云る之大殿ハ内京の法殿を云之醜燭と云もの也
吳國より後見事して後日本見るも作り之され本式
すあざら

一 闇を孔子と書る。例役名の款より

太平記卷卅三京
軍ノ条ニ挑井
播ノ守ヲ討テ
トテ軍ノヤウ
ヲ申サレケル
燭ヲ明ニトモシ
テ見玉フ云々
此時代既ニラウ
ワク有リ

貝原氏カ和漢
名数ニ箱根ヨリ
以東ヲ坂東ト
称ストアルハ後世
之説也関東ト
云モ箱根ノ関不
ヨリ東ノ事也ト
云フ人モアリ是
又近世ノ説也

一 関東坂東の事近江國會坂関より東を指て関東
と云上野と信濃の堺の碓井より東を坂東と云之
平家物語ハ齋藤列南ウ坂東武者の對を善也と云
を云へるも是之坂東八州と云ハ武藏お模あ房上総
下総若陸上野下野是之後世常陸を除て豆州を
加ハ小田原北條氏の領せし時之を陸ハ仇
井氏の領地と北條氏の領地ハ非ラ陸と云
関八州と云名目ハ非之坂東八州と云之又東鑑云
所の関東と云ハ右云と異也東鑑卷十七建仁二年
の紀ハ関東二十八ヶ國関西三十八ヶ國トあり是ハ五畿内

小東山東海二道ノ國を合て二十八州と北陸山陰山陽
南海西海五道の國を合て三十八州と云ふなり

一 此の事不詳なりとて目録に在りてある事を見る天道

不詳なりと云ふ古今著述集卷二十奥虫禽獸ノ部 或田舎人系

上りして信なるが夜もて天道不詳なりとて在りたる

一 空燒ソラタキと云ふ所あるは香煙ありといつともある香の

香カのこの紙をよみて是ハある人のいふ事あるを以てあり

香煙あり香をたき志めて香煙をかきし處之又陰の

煙ありて香をたきて其の煙ありにけり振るも

之但是ハ風よりくるものなるも有るかまてその

香煙も元元
いつともあり
ある所いなき
と云ふ空燒の事
うして法あり

座ありたき志めて煙あり

一 蛭ヒルカヒ喘カヒと云事古書に有る見ゆ尺素往來山槐記東濫廿五
明月記小右記等より

蛭といふ虫を捕へて腫物の上を置て膿血を吸ひ出せ

るもの之是古代の外科の療治也

一 生セイキ氣キ方と云ハ正月生ありハ卯の方之二月ハ辰三月ハ

巳四月ハ午以下準りし知る

書籍之部

付録ハ家流の書ハかくるるも非キテ古
去るる心持を記シテ示シテ其の
意を以テ示スル也

一 武家の故実記 たる書六双紙と名付く書六品ありし川

大双紙と云ハ七川伊豫守貞世の作也 貞世法名 宗五双紙

と云ハ伊勢下総守貞頼の作也 貞頼法名宗五と云ハ

云又弟云 大館大双紙と云ハ大館伊豫守尚氏の作也

尚氏法名常與と云大館大双紙 一名ハ書札認指秘傳抄と云ハ 佐々木大双紙と云ハ江州

佐々木氏の作也 佐々木氏名宗 三議一統大双紙と云ハ今

川小笠原伊勢の三家心を一ツとして記したる云と云

又大双紙と云ハ一冊あり三議一統と似るもの也

鎌倉大双紙と云
書あり是ハ永和
五年より文政十一
年と鎌倉の
合戦の事を出る
記録ハ二冊あり
故実方の云
あり一各太平
後記と云

作者つすひこのありす小笠原家の書也

一 三議一統ハ義満公の法代小笠原兵庫助長秀今川亮宗

太丈氏頼伊勢武藏守満忠ハ三人より作す三人心を

一ツとしてあはせたるハ三議一統と云由其書の序文より

見えり甚信のありき其書ハ貞丈抄也ハ三議一統の

書一冊の書也將軍家の作をうけ書滿より撰る書

とハ書多見えす自身の先書と見ゆる書之を上義

満公法代今川亮宗太丈氏頼伊勢武藏守満忠と

以テ人ハあり其以の今川ハ伊豫守貞世伊勢ハ伊勢守

貞信之見りて其信のありき其書を知らずハ其のよか云

貞丈三議一統
每一冊アラハシタ
リ見合スヘシ

満忠一本ハ憲

忠トアリ憲忠モ
伊勢氏ノ先祖
ニ無之

義満公法代日
記ノ中河ト云今

川伊豫守貞世
名見タリ其比今

川氏族モ多ト云
凡武家ノ故實ヲ

知タル人ハ貞世ナリ
今川大双紙ト云テ
武家ノ故実ヲ記

此序文と三儀一統と云題号とハ後人の偽作あり
 この書の本末いづれもゆき書と名あり之用は五
 きまのこの書の題号は尚承弘法集三儀一統大双
 とありいづれも書籍とも是れと云き題号の書あり
 すまのこれハ元承弘法集と云りいひる
 を後ハ三儀一統といふ名をくらとて書きたる也
 此書と云き題号ハ成たる也あり
 弘安禮節といふ書ハ今板行後宇多院の法代弘安
 年中ハ上皇龜山院の定め給ひ礼法を院中の
 公家より禁中へ對シその礼法之書の内書札の

礼法を取て武家の書札の法式より変て後世の
 ありて武家ハ別ハ武家の法式あり

虎ノ巻ノ事是
 ヨリ三枚目ニモ
 アリ

一 虎の巻といふ書一名ハ三畧の傳とも云是ハ源義経於
 臣鬼一法眼より受け傳へられとて傳へると世に傳
 る虎の巻といふ物義経の忠傳の書とあるやまき之
 似せものありて是れハ世に何日虎の巻を云々
 真言符字その外す一ありの指ありのこの書を
 のせて軍傳の用よりるをさるハともあり其書の奥に
 傳來の系圖ありその系圖の連名の内出家の名多
 く於れは付て考りふ書の一詳と思ひ合せられ出家の

されハ用よしぬ之早亮ハ生れたの智恵のたをき今何ん
されハ見ふるありかすされも多々書を足れ其
そ力ハ大概ハ足る然し

一 秘書といふ物ハ又さうに人ハ見せざるもあれも懇望する
人ハおしよるはゆりて書を寫せしむる我輩ハ
も人のあつても書何れハ書能くえうせりあつて
て後思ふも傳ふてあまうりよ別にかくして人よりうさ
せり耐ハ外ハ執あき直書能く有り

一 藤九郎盛長記と云書何れ杖桑見聞秘記と云書何
ハ見ゆ秘記ハ大江廣元の作と云書西巻とも年

杖桑見聞秘記
ハ大江廣元記
トテ其年三三廣
元ノ名ヲ記タリ
杖氏其公ニ記
セリテ廣元存
生時代ヨリ百
年斗後迄未
タル書ヲ引用ス
ルノ所ニアリ是
ヲ以テ全篇偽作
ナルヲ知ルヘシ
依之貞丈杖桑
見聞秘記亦偽
ト云書ヲアラセ
リ見ルヘシ

代のお遠もあり直実を初ぬ志のみうに偽作ある
書

有徳院抄成嶋道範ハ作有信長

記の内甚偽多き由大久保彦左衛門忠教ハ記見
えり彦左衛門ハ
本照宮古代ハ如世ハ偽多し古書の拾子
作りて古書ありき物ありみうに信作か

我々才情学あらず眼明あざされたがうきも
あり公家武家の直実の書も其の類あり
近世軍学者といふ志の書ハ其妄説偽作あり
油取申へし

義経記六六韜
の書とあり虎
の巻とありハ
又云々

一 或説は云源義経の虎の巻と云ハ太公望のあはるる
六韜と云書の中の虎韜の巻を云之今の世ハ六韜の
書板行しておあるはいふもあれども義経の時分
ハ板行いあへ世ハ甚珍なりかりし故鬼一法眼秘
して人ハ見えさうしを義経ひそく小盗に出して
虎韜の巻と云う事なりと云う説ハ虎の巻と云
とて此説ハさもさうき扱ふ事也

一 鎌倉年中行事と云書ハ頼朝夷朝將軍家の事
を記したる書ハあはるる且利辰のは代鎌倉のは所
基氏の家の年中行事之成氏の時の人かき書之

基氏ハ尊氏卿の二男とて義詮の才也

一 犬追物秘記と云書二冊板行し何う三浦介上総介西人
の作とてその書の本は名ある連名あり是太公望の傳
お之犬追物の古書の切れもつれをかしてあるは
近年の人新し作意を以て復する故古法も
曾てとある事ありやう小書なるお之又徳大寺
家の犬追物と書と云おあり是ハ正保年中武州豊
嶋郡王子村とて名は薩摩なる強坊とて犬追
物の作法を以て鎌倉朝時代の事には作りおし
換見も外も皆鎌倉時代の武士の名を以てして

犬追物秘記ハ
扶桑見ゆ私記
ノ抜書ノ傳作
ノ物也

らへ真書よけ出ハ徳大寺家の秘書あり中記しり
大あつ抄をおこしこれらの偽書を知らしめてまよひ
人多く歎しきあり

一 免のとの字子と云出何り、京都將軍時代の書にある
家のめれと我うとてて〜姫君へ来りせ〜と
中傳のそのと云女のいま〜め又女房の取立を
かきくるもの〜吾き書し

一 時傳十郎左衛門久慶の記したる大退治の書一巻を
元永八年ニ
記タル也 其書於朝時代の犬退治の事を書きしは
も有り 其いふかき書し偽書あり〜騎射秘抄の序

に犬退治の鎌倉の右大臣家 奕朝あり
米穀の子 の時権輿すあり
見たり 権輿といハ
始の事 然れハ頼朝の時代犬退治ハありき
偽書ありしなり

一 布衣記と云書ハ永仁三年八月法家の青侍北面等
二十余人富後越前等助成り宅又系舎して北面の
武士の故実を定め連判を以て中合る事之調査然の
役の事もは書し〜〜見たり 實録あり

一 訓閱集と云書あり醍醐天皇の法時大日維時合唐
キンロウ として傳来し軍術の秘書之を云ハ今ハ傳し
と世々訓閱集といふ書あり是ハ後の人の偽作あり

一 近世板行の書は楠七巻と云軍制の書なり是ハ楠

正成の家書として書の奥は正成の姓名あり然れ共

正成の書作よりあり以て物と云書は誤記の

事なり正成時代ハ誤記ハいふ事ありて是

何を初るハ和漢書ハ軍書ハ似て物多ク文字

あれハたゞさうさう也かやうの事も心得の記

書物の行の如くハイハ又ハイ本と書てあるハ

と云るハ異本とハ列の本と云るハ

又一本とありハ

又脱又ハ

又衍字と云ハ

唐人ハ人ノ名ニ
ハ右ノ方ニ朱引
ヲスル地名ニハ
字ノ尤ノワキニ
朱引スルコノ
外ニ朱引スル
フナニ字ヲ消
ニハ字ノ中ニ朱
ヲ引ナリ
又漢唐和元
明ナト云代ノ
名右ニ引

又衍文と云ハ ハカナルと云て古き書ハ 又脱又ハ 脱ハカナルと云て古き書ハ

又何嘗作何とあるハ たゞハ官

疑何と云ハ たゞハ本疑本とあるハ本の字うと疑

書物の文言ハ朱引はるるハ 変の名

と云地名ハ右の 官名

孔子 孟子 顔淵 義徒 又人の名 書名

年号 元祿 享保 元慶

名凡人の名ヲ知るぬ時 初るハ

是の爲に引く朱引の款あり 款は

句讀点形○ヲ
圖ト云○ヲ批ト
云句ニ圈点ヲ
用ルナラハ讀ム
批点ヲ用ヘシ如此
スルハ句ト讀トマ
ヤレスシテヨシ

一 君と云る中ハ人の名在こと官の集引と云ふを初メ

二 司引中の集引ハ物の名在事ハ年号と云ふ

一 名所中ハ人の名在官中ニハ書の名在ニハ年号は款一首を
是と云ふと云ふ

一 書物ハ篇章句讀と云ふ事アリハ篇とハ新ト云
を云ふ年と云ふ

一 一チ条くを云一一篇の 句とハ一チ条内ノ 讀とハ一節の内までを云 始り

内ハ幾ヶ条も有り 終り中ノの事ノ心を以ハ通事ノ章と云ふ事ヲありハ

いふを篇と云ふ長くとを事ノ心内ハ心のきれを句

と云一節の内をそのことその事ハれハを讀といハ

書物ハ集点ヲ付ルハ句の所ハ傍ハ丸ヲつけ讀

の所ハ一字の百ふ共中ハ丸ヲ付色たとハハ

集の序ありハ也句序ハ人の心讀を云ふ事ト云ふ

一 書籍ハ序跋ニヨ凡例と云事ヲ序と云ハ書籍の取物

ありハ書ハ何レの口けよりテ書ありハ何レの口けよりテ

いハ何レの口けよりテ序と云ハ跋と云ハ書籍の終

ハあり真書の事ト凡例と云ハその一書ノ書籍の

例をいふ事ヲ云ハ是ハ口けありハ口けありハ口けありハ

れハ口けありハ口けありハ口けありハ口けありハ

の口けありハ口けありハ口けありハ口けありハ

内典外典と云ハ 内典と云ハ儒書を外典と云ハ

くられハ出家の方をいふ御心

一 新書よ新書を著する所は何の事よりして時を

よくりたりといふこと有り書を作るコトカキといふ御心

一 子マハカキあ書を作るといふはぬ之田舎人の御心をお

書あるといふ

一 校合キヤウカウと校讐カウシヤとも校訂ケウテイともいふ書と彼書と同一類

本を考してあ方を引くこと遠くをいふ方の

本又出入れて並く置くをいふ

一 著述チヨシツとも編輯ヘンシウともいふ書籍を作りあはせるを

一 往キウとも解カイとも釋シヤクともいふ皆書籍の文句の知れぬ

事をつひりてきて條釈チョウシヤクをいふはことごとくをいふ註解チュケ註釋チュシヤク

あともいふ又注疏チュソともいふ

一 抄シウといふ校書ケウシヤと又註解チュケの事を抄ともいふ

一 書籍を幾巻といふ又巻の一巻の二あともいふ事ハ上古ハ

紙あのみし紙竹をいりて火をあかりて油をぬきて

己中ココロ外ソトよりなりて文字をいりてて章カウといふあつて

て巻といふし紙幾巻といひて又一篇二篇といふもあつて

室ムロといふ篇ヘンといふといふし書籍ショセキを作る事を書

あつてといふものより起りたる御心ミコトココロを後代ゴダイをつぎ

て書物ショモノといふもの御心ミコトココロをまゝあつたる之巻物マキモノといふ御

くろひるけて便り 恐き故折本と申すなりあり
已が本あれ程古の趣を以て幾世も其の二を考ふ
書籍を書き流すはかとも本著と遠き折は文字をも
假名をも写さす一 本著小書遠と云ゆらも其趣
に寄一 意へ 趣外の同書を探して引く一 此書
一 我推量を以て本著の文字を書き出して其趣を
きりて我推量の考を以て文字の傍に朱を以てかき
かえ置へ一

一 義経記、作者詳ありとされ其の考き書之を我
物語に比叡山の傍の作之これひと親王はいつの事なり

活いりの解はハロの山のちう中よと名を以て之を
して推て知る一 但作者の名は忘れず源平盛衰記の葉
室大納言時長はの作之平家物語の信濃前日行長の
の作之太平記の玄恵法師薬師次郎長兼の木の作之保
元物語平治物語作者は忘れされとも其の考き書あり
かやうの古き物語の類は幾探あり物之故実の考
ありとも 別々なり

一 唐土の書ハ四書五経史記漢書を以て始めとておひき
しありて不足あり上り又年々唐土よりも後世來
る故かゝの書ハ不足ありあり日本に古代の書ハ及ぶ

兵乱はやけうせし甚く是又かろの事を知りたる
物ありのふか多かれとも日本の事を志する物ありの
か日本は生れては日本の古事知実出を知りたる
日本上古のふき日記日本書紀古事記古語拾遺續
日本紀日本後紀續日本後紀文徳実録三代実
録類聚國史等又世継物語續世継物語神皇
正統記日本紀畧帝王編年紀の類も実録之禁
衣法式のふ延喜式儀式律令格式西宮記北山抄家
次第雲圖抄ホ之官位の故実ハ官職秘抄職原抄
百寮訓要抄等之装束の故実ハ後照念院及装

束抄雅亮装束抄 饒抄桃華藻葉抄宸翰装束抄
三条装束抄ホ之是のふに張る古書ハ数ふべき
もあし古実を好む人ハ志すとい交りて求めハ世
跡し古書おのつら子ハ入るの之又武家の日記
ハ東鑑ハ実録之鎌倉の日記之室町記室町日記を
も京都將軍の实録之古の实録を似せて偽
作りたる書も有能く衆てとるべし又禁中の故
ハ禁秘抄侍中郡要公事根源後醍醐院年中行事
同日中行事ホふあり拾遺抄ももるの事あり
以外古書ハ数多あり尋事ハ

一 高忠少書云八寛正年中以の人多賀老後言忠
 小笠原辰不守て著るもおとろ矢木の故実を記せし
 き書之後の人美人草と名つけたりの書を見人の
 むく秘苑とて今もみせられし心こそ名付しうと
 云傳ふは是書先年板切しと世も多く有しう有ハ
 板切の本世も少く成り 板切の本もよき本之
 少文字の書あり
 一 奥州十二年の合戦後忠お 前九年後三年
 の合戦ありハ先陣を維
 久の画きし之謙倉將軍實朝公の時京於りあり奇
 せ給ひしよし 東鑑卷十九 二丁
 四丁と云えり又將門合戦の
 徳をもつてせしれ 中興卷と云えり十二年合戦の

東鑑卷十九兼
 元四年庚午十
 月廿三日丁未奥
 州十二年合戦
 繪自京都被而
 下之今日御覽
 仲業依俗續十
 申其詞云、
 東鑑卷十八元
 元年甲子十月
 廿六日甲申將軍
 家日未作画工
 於京都被圖
 將門合戦繪今
 日到東掃部頭
 入道所調進也
 二十箇卷納時
 繪櫃殊而自
 愛云、

繪をも世も何り又土佐光信の一谷合戦の徳又保元平治
 合戦の徳又土佐光長う年中行事の徳も外古代の
 徳陣の画る徳ハ愈更の考の有るあり事多し心を
 付て名下一人物衣服法道具の類今の世の徳と取乃
 遠くも多し何れも其心を付て考へし古代の繪今も
 世も多しあり
 何事をも正史実録なるきあり信用しかりきあり
 とも正史実録は名も事多し又たしあり實事あり
 るもあり正史実録は記し漏りたる多し法家の日記
 に記してあれども世も著く人知ぬ事多し何り其本

實朝公の歌集
女金塊集と云三
冊あり晴を祈
給一歌金塊集に
あり夫木抄ノ歌
ハ金塊集より
授たる也

抄に鎌倉右大臣実朝晴を祈り給ひし歌
ときによりすくれハ民のあけきハ大統王の命あたす人
ハ歌集に云建曆元年七月洪水滔天土民愁歎せん
事を思ひて一人幸而本宮致祈念云々右木抄東鑑卷十
九建曆元年七月の記文を名ふ実朝ハ西をうらへて
晴を祈り給ひし事見えず然も実朝公の由集より
見ざる事あれハ俗にありて実朝公ハ東鑑より元
きりありあれハこそ傳也といひしハ以東鑑に記漏し
たることありて女抄ありしことありし

一前太平記又前々大平記ありハ近代の人の作也武具馬

前太平記ハ林大
学頭ノ才子平山
素閑と云者ノ
作也京都に住シ
テ石田軍記作
り板行シ作者
御詮義ニ依テ
京都ヲ夜逃シテ
江戸へ来リ正徳
二年死去ハ十文
也古キ物語ナト
ヲアツメテ前々平
記ヲ書タレ其
中ニ自作妄説
ヲ多ク交タレハ
信用スルニタラ
ス證據ニ引用
ベカラス

具あるの考ハあらず其の證據より引くこと幼き子世の
もてあそび陰々としの歌もとも古代の人の作りしもの
有実の考もあり證據に引用多しあり言館草子田村
孝子めのとの孝子文正孝子ふとの歌如くハ巻の
玩物あれ古き虫之證據より引くこと
和漢朗詠集ハ四條大納言公任の集められし書
に書小詩も有り又も有り如きありしを
つけしものを朗詠と云ハ古代の酒宴あつた時にも
又折るれ事よゆれて一時付世事よわき世無の
情歌をうらひしことありしもの傳ひある

感やうの類へ

一 室町記六卷 真宝 是ハ実録之又室町辰日記 十卷分り平カテ 是又実

録之室町辰日記 真字ニテ書廿九卷 是ハ偽書之用へり

一 先代舊事本記 旧事記トハカリモ云 といふ書あり 今板り 是ハ聖徳

太子の活作と云古き書に絶れず聖徳太子の活作

ハありす古代の偽書之吉田家の先祖の偽り作り

物ありと云人あり古書あれも偽作物あり故用

えり又舊事大成録と云書あり是をも舊事本記と云

是ハ穢の聖徳太子の活作と云是ハ於大ニ偽書之元

録年中のりれ思滝の源音禪師と云偽と志麻呂

伊雜宮の神まことの偽作之事何れに於て各流罪は處
せられりとの書板行したるハ絶板は成りされども上爰
うしこふ持する人もありて信作も人もありありの云
子惑ありあり也

江原武監又大系圖又和論語彙余實記義經勲功
記等の類皆偽也之故實の考より

日記と見記とハ列のりて日記と云ハ表する事を記し
後禮の爲に記せるを云日記と云ハ其日の晴雨を始り
新事を記せるを云湯湯殿上日記ハ 日々 記
けひよりきと云ハ湯湯殿の上より官女の其日の事を

記せし別の文と見えたりされハ鱗川親元ウ記セし中
 目ノ記ト云ハ有リ即チ目ノ事ヲ注セし故目ノ記ヨリ
 日ノ記ト唱^{ニチキ}（す）てひたつ^{日ノ記}キト云ハ有リ

一八廻日記の事犬追物の矢沙法を記せし書なきて八廻日
 記又八廻外書あり云々凡八廻と云ハ何処ニ案ず
 るにハの字ハ假字マレ矢の字あり〜左あり、犬追物
 の繩きとみ射る矢の落てあるを矢沙法と云矢廻と
 いふるあり〜

貞丈雜記大尾

弘化三丙午年六月發兌

大坂書肆
 河内屋藤兵衛
 河内屋茂兵衛

江戸書肆
 須原屋茂兵衛
 岡田屋嘉七
 山城屋佐兵衛
 須原屋伊八
 丁子屋平兵衛

